

の一團が居りますのを認めました。はてな朝早くから何だらうと怪しみながらだん／＼近づきますと、こは如何に、ケント公爵夫人には女皇とともに新鮮なる空気を吸ひ玉ひつゝ、黄草原の上で、朝飯をめし上がつて居らせらるゝのでございしました、私は恐れ入りまして、直ちに駆け返りませうとも思ひましたが、ケント公爵夫人の御思召を恐察したてまつり、また女皇の美しき玉の如き御容顔と、時々溢れん許りの愛情を以て女皇と御話しし給ふケント公爵夫人の御様子拜し奉りては、なかく／＼に逃げ歸りもならず、思はず地に伏して拜しました。感にたへずして涙を催ふし身はぞく／＼と戦へるやうに覺へました、是か即ち美感に打たれたのでございませう、ケント公爵夫人が教育に御熱心

なる、誠に斯くの如し、私は公爵夫人及び其の愛女の幸福を祈り、さて後に神に謝しました、今の世にあたり、かゝる有り難き神聖なる教育及び其の教育の結果を、まのあたり見ることを得たる恩恵に向つて神に謝しました。

云々とありますが、誠に公爵夫人の御熱心なることは能く表れて居ります。(つゞく)

時間なく空に雲そふ五月雨に

のきばの梅に實さへこぼるゝ

野村望東尼

下村三四吉

明治の維新は、空前の盛事なり、蓋し多年養成せられたる尊王の氣風は、徳川幕府の盛時より已

に一道の暗潮を成せりしが、外交問題の切迫するに及びて、一時に激發し、その勢滔々として、遂に徳川幕府の基礎を漂蕩し去り、明治の大御世を開きぬ、この際、身を以て國家に殉したる義烈の人士は、擧げて數ふべからず、婦人にして、これにあづかれるも、またありて、近衛家の老女津崎村岡と福岡の野村望東尼とは、ことに著れたり。後なる人の事歴は、余が今ここに述べんとおもふところなり。

望東尼のはじめの名は、もと子といへり。筑前國福岡の藩士浦野十兵衛勝幸が次女にて、文化三年九月を以て生れたり。容貌は、溫和なれども、その性明敏にして、剛健快活の氣象をそなへき。婦人の諸藝能に通じたりしは、いふまでもなく、和歌及び筆道も、大隈言道を師として、その妙に

至れり。年廿四の時、同藩の士野村新三郎貞貫に嫁して、その後室となりしが、琴瑟能く調ひ情交甚だ密なりき。

新三郎は、學ありて、風雅の道を好みければ、壯年過ぐる頃、家を子息卯右衛門に譲りて隱居の身となりぬ。福岡城下の南に平尾山といへるがありて、しげれる木立、清きながれ、幽邃閑雅の景致に富みたり。新三郎、よりに別荘をこゝに營み夫妻相携さへて林泉の間に唱和饒遊し、いとも樂しき生活を送りぬ。

歲月いくたびか改まりて、もと子が年五十四に及びけるとき、夫新三郎は病にかゝりて歿りぬ。悲歎の情やるかたなく、孤棲の夢破れがちなりき。もと子遂に髪をおろして尼となり、名を望東と改めぬ。こは、もと、望東とは、國音相近き上に、

東を望みて禁闕をしたひ奉る意をもよそへて、つ

けたるなりといふ。望東が勤王の志こゝにはの見

えたり。更にこれを發揚せしめしものは、實に當

時の時勢なり。從來極めて平和なりし生活は、や

うやく變化を呈せんとす。

米艦が始めて浦賀に來りて通商を求めける嘉永

六年は、正に望東が四十八歳の時に當れり。これ

より、尊王攘夷の論海内に喧しく、人心恟々とし

て、國家の安危たゞこの一時にとぞ思はれける。

幕府が勅許を経ずして五國通商條約に調印した

るを始めとして、十三代將軍家定の養君問題に關

する紛議、水戸家に攘夷依頼の内勅を賜はりたる

より起れる安政戊午(五年)の大獄より、さては、

萬延元年の大老井伊直弼の遺害に至るまで、幾多

の驚心駭目の事、相ついで起り、内外實に多難を

極めぬ。志あるものいかに、奮ひ起ちて國事に盡

力せざるべき。夫に死別れて後、また人間の事に

意なきものゝ如くなりし望東尼も(夫を喪ひしは、

即ち安政六年なり)、時勢の影響を被ふり、亡夫に

對する悲嘆の情より驅られて、更に勤王の熱血は

その血管に沸きぬ。されど、さすがに、貞靜の女

性なり、徒に狂奔して爲すところなき思をば學ば

ず。請ふ、徐にその經過を語らしめよ。

この時に當り、朝廷は幕府の專斷を憤らせられ

下には、尊王攘夷の説益々盛んにして、朝廷と幕

府との間漸く乖離を見んとす。こゝに於いて、い

はゆる公武合體説は起り、文久元年冬、皇妹和宮、

十四代將軍家茂に降嫁せられき。望東、その行裝

を拜せんために、京都に赴きしが海上風波にわひ、

期に後れしかば、因りて京都に滞留し、或は名勝

故蹟を尋ね、或は調を名公に求め、交を志士に結ひぬ。

先に、安政戊午の大獄の時、上に記せる津崎村岡は、水戸賜勅の事に周旋するところありしかばを以て、幕吏に捕へられ、一旦江戸に押送せられ評定所の糾問を受けしが、やうやく放免せられき。これより、村岡は、京都嵯峨なる直指庵に幽居し、近衛家の先代并に亡友月照の冥福を祈りて静に餘生を送れり。望東尼、一日嵐山に遊び、歸途、村岡の幽居を訪ひけるが、村岡嫌疑を避け、面晤を辭せり。望東、残り惜しさ限りなく、雲井にも、君が名たかく、聞えけり、したひくる身を、わはれとも見よ」とよみ出でしかば、村岡も「はるばると、たづねし君の、めぐみをも、しづ心なく、わはでぐるしき」と答へき。勤王の志篤き二兩

女傑の心事眞に想像するに堪へたり。(つゞく)

川骨の一輪強き姿かな



汐干狩

中島歌子

いつこまで汐はひつらん袖か浦

小さくみゆる沖の人かけ

首夏蝶

同人

飛てふの羽袖もしろしうの花の

はるを隔てしかさねわたりは